

東南アジアにおける生活デザインのハイブリッド性についての調査研究

—プラナカン・デザインの現代的役割を探る試み—

ON THE CULTURAL HYBRIDNESS OF EVERYDAY LIFE DESIGN IN SOUTHEAST ASIA

Focusing On the Modern Roles of Peranakan Designs

今村 文彦 基礎教育センター 教授
見寺 貞子 芸術工学部ファッションデザイン学科 教授
長野 真紀 芸術工学部環境デザイン学科 助教

Fumihiko IMAMURA Center for Liberal Arts, Professor
Sadako MITERA Department of Fashion and Textile Design, School of Arts and Design, Professor
Maki NAGANO Department of Environmental Design, School of Arts and Design, Assistant Professor

要旨

本報告は、東南アジアの生活デザインにみられるハイブリッド性を探る試みとして、「プラナカン様式」という東洋(中国、マレー)と西洋を折衷、融合させたデザインに焦点をあて、その歴史的背景、建築、服飾、インテリア、生活用品等の生活全般におよぶデザインの特徴および近年になって再評価されている現代的な意味について検討するものである。

2017年度はプラナカンの現状把握を目的として、マレーシア・マラッカおよびシンガポールにおいてプラナカン・デザインを代表するショップハウスの実態調査を中心に現地調査をおこなった。ショップハウスは1階を店舗等の商用、2階を住居として用いる長屋式の建築で、東南アジア各地の沿岸部にみられる。マラッカは17世紀中頃から華人の住居として建築され、20世紀後半に至るまで多様な様式のショップハウスが保存されている。そのファサードにみられる装飾の分析から多様な文化的伝統を組みあわせ、融合させていることが確認できた。シンガポールではショップハウスの修復整備が国家レベルでおこなわれている状況を確認するとともに、かつての経済的繁栄に対応した豪華で色鮮やかな装飾が特徴であることを理解した。

これを踏まえて継続的に調査研究をおこない、プラナカンの理解を深めることにする。

Summary

This report attempts to make clear the hybridness of everyday cultural designs in Southeast Asia, through focusing on the Peranakan designs, which made compromise between Eastern cultures (Chinese, Malay) and Western ones. Peranakan designs including architecture, fashion and interior, are reevaluated as cultural heritage of national unity and tourism in Malaysia and Singapore.

In this year, we carried out overseas researches on shophouses of Malacca and Singapore, in order to understand the actual conditions of Peranakan Design today. We could understand the variety of patterns of shophouses in Malacca, built from 17 to 20CE, which are reflected in decorative designs of façade of shophouses arranging Chinese motifs and European motifs

We got very useful insights from these researches for deep understanding about design cultures of Peranakan.

1) 研究目的

本研究は東南アジアの生活デザインのあり方、現状を探る試みとして、「プラナカン様式」という東洋（中国、マレー）と西洋を折衷、融合させたデザインに焦点をあて、その歴史的経緯および建築、服飾、インテリア、生活用品等に用いられた装飾や色彩のデザインの特徴、これらを生みだした東南アジアの華人社会の実態について、現地調査をもとに明らかにするものである。また近年、マラッカ、ペナン、シンガポールではプラナカン様式が民族的統合のモデルとして取りあげられ、観光資源としても再評価されているが、その現代的な意味についても検討する。

東南アジアにおける生活デザインを特徴づけるものの一つにハイブリッド性（融合性）を指摘することができる。この地域は古くからインド洋や南シナ海の海上交通を通じて民族間の社会的文化的交流が活発におこなわれ、仏教やヒンドゥー教も積極的に受容しつつ、新たな要素も排除することなく重層的包摂的に取り込み、巧みに独自の世界を構成してきた。

本研究を通じて、多様で異質な要素を融合し、独自の表現様式を生みだしてきたハイブリッド性の仕組みとその社会的文化的背景について、プラナカンを具体例としてアジアの文化史的文脈の中で解明することを最終的な目的とする。

この報告では、プラナカン様式の実態把握を目的として2017年度に実施した2回の現地調査（マレーシア・マラッカ [2017年11月2～6日]、シンガポール [2018年2月1～5日]）から、主にショップハウスに関して得られた知見を中心に述べる。

2) 研究の背景—プラナカンと生活デザイン—

東南アジア、とくにマレー半島、ジャワ島では15世紀以降にヨーロッパ諸国による植民地化（香辛料交易、ゴム・プランテーション、錫鉱山経営等）が進む一方で、清代末（19世紀後半）の内乱や飢饉により中国南部地域（福建、客家、潮州、広州、海南島等）から排出された大量の華人移民が植民地で交易、肉体労働



図1. プラナカンをめぐる歴史的状况

（主に苦力）に従事した。中国本土では女性の海外渡航が禁止されていたことから移民の大半を占める男性は現地人女性（マレー系、インドネシア系）と結婚し土着化していった（図1）。プラナカン（Peranakan）とは、彼らの現地生まれの混血子孫を指し示し、男性はババ（baba）、女性はニョニヤ（nyonya）と親称された。

イギリスの「海峡植民地」であったペナン、マラッカ、シンガポールの富裕なプラナカンは植民地政府と結びつき、19世紀後半から20世紀前半にかけて中国の伝統的生活様式と欧米の生活様式を融合、折衷させた独自の生活スタイル「プラナカン様式」を創出した。プラナカン様式は芸術、建築（ショップハウス）、インテリア、生活用品、料理、服飾、生活習慣、人生儀礼等の生活全般におよび、模様（花、植物）、色彩等のデザインに特徴がある。

第二次世界大戦後の国民国家形成期には旧宗主国に従属していたとして長らく無視され、その文化的伝統は衰退の途をたどっていた。20世紀末から他民族主義、多文化主義が世界的に台頭する過程で東南アジア各国で再評価が進み、2008年にペナン、マラッカのプラナカン文化が世界遺産に指定されたことを契機として、シンガポールでも「第4の文化」に指定されるなど、プラナカンを取りまく社会文化的環境が一変した。本研究でも、こうした状況を背景に現代社会にお

けるプラナカン文化の役割、意味についても考察を加えることにしている。

3) マラッカのプラナカン文化

マラッカはマレー半島とスマトラ島に挟まれたマラッカ海峡のほぼ中央部に位置し、東西交易の要衝として古くから開けたところで、14世紀に建国されたマラッカ王国を経て、1511年にはポルトガルが領有し、以降20世紀まで続く植民地時代を迎える。1641年にオランダが占領して以降、植民地での取引に従事する華人の移民が次第に増加し、マラッカ川の西岸に広がる地域に華人の居住街区も建設されていった。マラッカで世界遺産にコア保存地区として指定されたのは、植民地統治機関が集まるマラッカ川東岸とともに、多くの華人やプラナカンが居住してきたこの地区であり、今回の調査対象地域である。1824年にイギリスに譲渡されると、20世紀中頃まで多くのプラナカン商人が経済的実権を握り、多様なプラナカン文化が展開された。

3-1) マラッカのショップハウス

マラッカのプラナカン様式を代表するのがショップハウスのファサード装飾である。ショップハウスとは、中国南部、台湾、東南アジア各地の沿海部に広く分布している建築様式で、1階入口部分を店舗など商用として用い、2階を住民の居住区とする職住兼用の長屋式の集住建物である。通常、間口が狭く(5~6メートル)、奥行きが深い(20~50メートル)細長い形状を特徴とする。奥行きに向かって2~3棟が連続して建てられ、棟の間は採光、通風、天水受けのための吹き抜けが設けられる(図2)。

マラッカでは主に華人たちの住居として17世紀中期以降のオランダ時代から建築され、華人の移民が増え、経済力を持つにつれ、多様な様式のショップハウスが建設されてきたが、調査対象地である保存地区には600棟近くが保存されている。

現在、この地区の中心に伸びるハン・ジュバット通り(Jl.Hang Jebat)の多くのショップハウスは観光客向

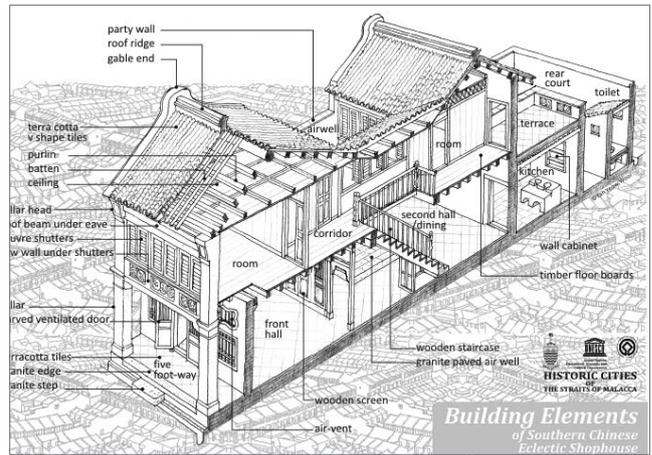


図2. マラッカのショップハウスの構造モデル^{注1}

けの飲食店や土産物店に利用される一方、この通りの南にあり、かつての海岸に沿ったトゥン・タン・チェン・ロック通り(Jl. Tun Tan Cheng Lock)は以前にはヘーレン(Jl. Heeren / 紳士)通りと呼ばれたように裕福なプラナカンの居宅として用いられたショップハウスが多く、中国風の模様や聯句、扁額が掲げられ、落ち着いた町並みが続く。この通りのショップハウスは不在となっているところが多く、19世紀末頃から経済的に繁栄するシンガポールに仕事場を移して週末に戻ってくる所有者も多い。

これらのショップハウスの建築としての特色、構造等の学術的調査研究はすでに精力的に実施されており、世界遺産指定時にも綿密な調査がおこなわれている。その結果として時代ごとに識別できる主な様式として以下の9つの様式をあげることができる^{注2}。

- ①オランダ様式(17~18世紀)
- ②中国南部様式(18~19世紀)
- ③初期ショップハウス様式(19~20世紀)
- ④初期変移様式(1840~1900)
- ⑤初期海峡折衷様式(1890~1920)
- ⑥後期海峡折衷様式(1920~1940)
- ⑦新古典様式(1920~1950)
- ⑧アールデコ様式(1930~1950)
- ⑨初期モダン様式(1950~1990)

これらの様式の中で19世紀からの③初期ショップハウス様式以降、1階入口部分が奥に引き込み、2階部分が張りだした構造が目立つようになる。これは

様式	オランダ様式 17c～18c	中国南部様式 18c～19c	初期ショップ ハウス様式 19c～20c	初期変移様式 1840-1900	初期海峡折衷 様式 1890～1920	後期海峡折衷 様式 1920～1940	新古典様式 1920～1950	アールデコ 様式 1930～1950	初期モダン 様式 1950-1990
特徴	<ul style="list-style-type: none"> ・ 最初期の建築（店舗はなく住居専用） ・ 平屋または2階建て ・ 1つの窓か左右対称の2つの窓 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 中国様式の修正版（吹抜けと中庭） ・ 象徴的装飾（招福、方角、季節、風水等の象徴性） 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 2階建て（2階がせり出す） ・ 基本的にシンプル ・ 高さは低い ・ 単純な傾斜屋根で長屋形式 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 2階建て ・ 歩廊がつく ・ 特徴的な切妻（破風） ・ 装飾はシンプルで、植物のモチーフ 	<ul style="list-style-type: none"> ・ ファサードの装飾は控えめ ・ 戸と窓は圧倒的に木製 ・ 仕切り窓は四角か半円のガラス窓 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 最も華やかな装飾 ・ 窓により壁面は最小化 ・ 多様な民族的伝統的なモチーフのファサード 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 通常3階建て ・ 新ゴシック、バロック、アラビヤ、ルネサンス等の様式が混在 ・ 花網模様が一般的 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 直線的（水平か垂直） ・ 窓は一体化され、金属枠を使用 ・ 張り出した庇、欄干 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 多様な近代的建築様式による ・ 地域の影響はあるが近代的様式に変換

表1. マラッカのショップハウス様式^{注2}



写真1. オランダ様式



写真2. 後期海峡折衷様式

騎楼、歩廊、亭子脚と呼ばれるもので、中国南部に起源をもつとされる建築様式で、海峡植民地をはじめとする東南アジアの植民地に広がったのは、シンガポールを植民地として占領し、経済的繁栄の礎を築いたラッフルズが1822年に制定した都市計画の中で日除け、雨除けを目的として5フィート（約1.5メートル）の通路を設けるように規定したのが起源とされる。マラッカやシンガポールでは、five foot way（英語）、kaki lima（マレー語）と呼ばれる。マラッカでも19世紀後半からこの様式のショップハウスが増え、さらにプラナカンたちの経済力が増大するにつれ、中国式の建築要素が付加された。とくにファサードを中心に、伝統的な中国の装飾（麒麟、獅子、鳳凰等のテラコッタ）、ヨーロッパのさまざまな装飾が施されるようになった。

3-2) ファサードにみるデザインの文化的複合性

今回の現地調査では保存地区内にあるショップハウスのファサードを写真撮影し、建物ごとの様式、用途、

模様（植物、動物、神話上の動物、文字等）を確認した。従来のショップハウス研究の多くは建築学的見地からのものが多く、ファサードのデザイン的特徴、とくに装飾についてほとんど言及されていない。

トゥン・タン・チェン・ロック（ヘーレン）通りについてみると、調査対象のショップハウス185戸のうち居住形態別の内訳は、住居（居住/不在含む）85戸、観光客向け店舗53戸、地元向け店舗23戸、その他24戸で、住居用のショップハウスが多い。さらに様式ごとにみていくと、①オランダ様式68戸（写真1）、②中国南部様式45戸、③初期ショップハウス様式5戸、④初期変移様式14戸、⑤初期海峡折衷様式13戸、⑥後期海峡折衷様式10戸（写真2）、⑦新古典様式8戸、⑧アールデコ様式4戸、⑨初期モダン様式4戸、その他14戸で、この通りは圧倒的に初期のオランダ様式、中国南部様式の建物が中心となっていて、古くからの建物がよく保存されてきたともいえる。

これらのショップハウスのファサードにはさまざまな装飾が施されている（表2）。最も多いのが植物（59戸）や花（35戸）の模様で、1階と2階の間の庇上に、彩色されたテラコッタで作られた牡丹や菊などの中国由



写真3. ファサード（植物と動物を組み合わせたテラコッタ）

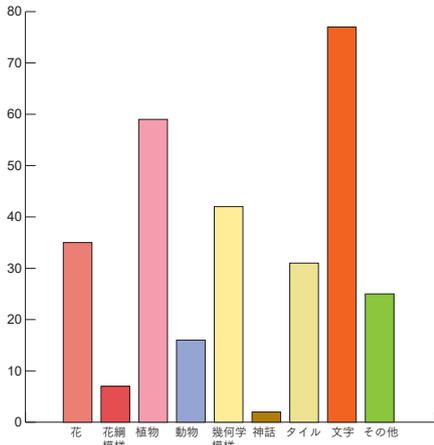


表2. ファサード装飾の種類
(トウン・タン・チェン・ロック通り)

来の草花や薔薇をはじめとするヨーロッパ由来の草花などさまざまな種類の花が混在する。また2階屋根の柱部分にも草花が描かれて

いることが多い。これらの植物模様は麒麟、鳳凰、コウモリ等の中国の伝説的動物や縁起のよい動物と組み合わせられて、中国とヨーロッパのモチーフが混在し、ファサードに独特の表情をつくりだしている(写真3)。

タイルは1階入口の床面や窓の下袖に貼られているが、伝統的な中国の模様以外には、ヨーロッパから輸入された薔薇やイスラム由来の幾何学模様なども数多く用いられており、文化的な複合性、融合性をみることができる(写真4)。

これらの装飾模様と並んで特徴的なものとして1階入口、窓の回りや錠戸に扁額や対聯・対句として書かれたり、刻まれた文字群である。「國恩」「家慶」、「福



写真4. ヨーロッパ由来(薔薇)のタイル



写真5. 多彩な対聯の文字群

海」「寿山」、「瑞気」「祥光」等の家運安泰、忠孝、吉祥、風雅を祝福し、鼓舞する句や文言が多い(写真5)。これらの文字群は、男性(ババ)の家長が家格や家風を示すために表示するものであることから、中国の伝統的な価値観を反映していると考えられることができる。

このようにマラッカのショップハウスにみられるさまざまな装飾の分析からハイブリッドなデザインのあり方を確認することができた。

4) シンガポールのショップハウス

シンガポールについては2018年2月に主にショップハウスの実態把握を目的に現地調査を実施した。シンガポールは1819年のラッフルズによる植民地化以降経済的に繁栄し、多くのプラナカンがマラッカやペナンから移住するとともに中国本土からも多くの華人が押しかけた。1920年代のチャイナタウンではショップハウスの分割化が進み、1918年の調査では1軒あたりの分割戸数は平均14戸、居住者数も36人という過密ぶりで、現在でも中国系住民が国民の4分の3を占め、狭い国土もあって人口密度も高い。

1965年にマレーシア連邦から分離独立して以来、近代化と工業化の中で、とくに1920年代以降スラム化していたチャイナタウンや華人居住地区に密集していたショップハウスの再開発が進められた。しかし、1980年代から伝統的なショップハウスの保存政策に転換し、ショップハウスの修復、同じ様式での再開発等の手法で、チャイナタウン、カトン地区、ゲイラン等のいくつかの保存地区では全体的な町並みも整備されるようになった(写真6)。



写真6. 修復整備されたショップハウス(エメラルドストリート)

シンガポールのショップハウスは植民地化後の1820年代以降のものが多く、様式としてはマラッカの④初期変移様式からの5～6種類で構成される。

しかし、マラッカと異なり経済的に裕福であったため、ショップハウスの多くは3階建てで、ファサードを飾る装飾の種類についてはマラッカとそれほどの違



写真7. 豪華で色鮮やかな装飾(カトン)

いはないものの、タイル等も含めて豪華で華やかな色合いのものが数多くみられた(写真7)。

5) まとめ

2017年度はプラナカン文化の中でもショップハウスに焦点をあて、現地調査をおこなった。プラナカン文化は建築をはじめ、インテリア、生活用品、料理、服飾、生活習慣、人生儀礼等の生活全般におよぶものであるが、実際のところショップハウスを除くとプラナカンを体現して生活を営んでいる状況はほとんどみることが不可能で、その実態を把握するのはかなり困難な状況にあることは否めない。第二次大戦後の脱植民地期にはマレーシア、シンガポール、インドネシアといったプラナカンが活躍した地域では、彼らは「King's Chinese 廷臣華人」と名指しされ、民主主義に敵対する存在として政治的・経済的に排除された。その頃にかねてからの生活を支え、プライドの源泉となった生活資材の大半が売り払われてしまい、「プラナカン」という呼称さえ忘却されたのである。

現在、われわれがプラナカンを体験するにはプラナカンをテーマにした博物館^{注3}、レストラン(ニョニヤ料理、ババ料理)、バティックやビーズ細工の工房などに限定されている。歴史遺産、観光資源として語られるいわゆる「プラナカン」とは、現実には容易に手

が届きそうにないところにあるのと同時に、プラナカンとしてとりあげられている対象は、ショップハウス、インテリアを除くと、料理、服飾(バティック、刺繍、ビーズ、宝石)、人生儀礼(結婚式、葬式)等ドメスティック領域に属するものばかりである。プラナカン文化の女性的側面が強調され、植民地時代に政治的・経済的に活躍した男性の文化的領域については言及されることがほとんどない^{注4}。

マレーシアやシンガポールという国家が多文化主義、他民族主義を標榜して民族的統合を企画する現状において、プラナカンの男性的側面は意図的に見えない状態にされているとさえいえる。プラナカン文化が現代においてもつ役割は観光資源として重要であるが、その政治性を見失うわけにはいかない。

今後、こうしたジェンダー的視点も配慮したうえでこの地域の調査を継続していきたい。

なお、マラッカ調査は2017年度大学院科目「プロジェクト科目(研究機構連携科目)B」としても実施しており、後藤静、渡邊麻友子、富永明日香、鈴木徹、三嶋明宏の5名の院生が参加した。調査に先立って事前研究を重ね、調査においても協力してもらうとともに各自で研究テーマを設定して調査をおこなった。注記のある図表を除いた図表は筆者が作成した。また写真は筆者および調査メンバーが撮影した。

注

1)「Shanghai Street Stories」(<http://shanghaistreetstories.com/?p=6314>)より転載(最終アクセス日:2018.9.26)

2)Maarten den Teuling, "REBIRTH OF THE MALACCA SHOPHOUSE, A TYPOLOGICAL RESEARCH", Technische Universiteit Delft, 2009, pp.31-61

3)シンガポールのプラナカン博物館は、2008年に開設され、プラナカン文化についての包括的な展示をおこなっている。このほかマラッカ、ペナンにも私設博物館があり、ジャカルタでも計画されている。

4)Karen M. Teoh, "Domesticating Hybridity: Straits Chinese Cultural Heritage Projects in Malaysia and Singapore" in *Cross-Currents: East Asian History and Culture Review*, 17, 2015, pp.59-85 (<http://cross-currents.berkeley.edu/e-journal/issue-17>)